

学校名	上野原市立上野原小学校	教科等	国語科
研究主題	自ら進んで考え、自他と対話しながら課題を解決しようとする子供の育成 ～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図った授業づくりを通して～		

1. 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

①授業を支える教師の在り方研究

- ・日常の授業における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を支える取組、それを支える教師の役割について、研究授業を通して、より具体的な教師の姿を共有すると同時に授業を支える教師の在り方を構成する要素を見いだしていく。そして、より自分事として日常の教育活動や授業の改善を図っていく。

②「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図った授業デザイン研究

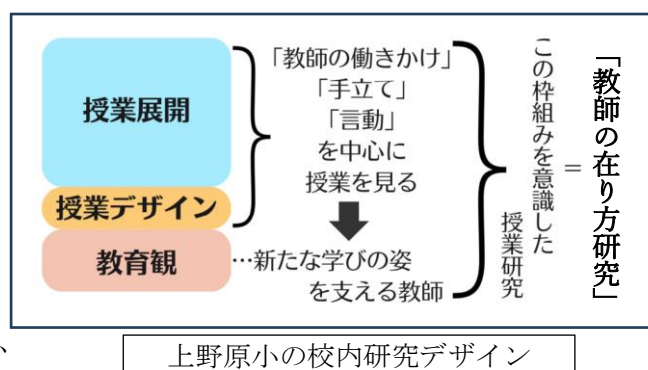
- ・低/中/高学年ブロックごとに研究授業を行い、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図った授業デザインについて、授業実践を通して検証する。
- ・ICTの効果的な利活用について具体例を共有し、授業に生かす。

③教師の新たな学び研究

- ・ウェアラブルカメラを活用し、教師の視点から授業を見直し、授業を支える教師の在り方についてより具体的に検証する。
- ・教師の新たな学びの視点から ICT を活用し、授業研究方法を見直していく。

(2) 具体的な研究活動

- ①・研究授業後の研究会では、授業の中で行われた教師の言動について注目し、その言動の意図、実際に児童に与えた影響について検証した。また、それらが子供主体の授業をデザインする上で効果的だったかについても考察した。
- ・授業動画を用いた授業研究も行い、注目すべき場면을複数取り上げ、その場面について掘り下げていった。動画を見返すことと同時に、授業者へのインタビューも行い、授業者としての意図や思いを交えて考えた。
- ・これらの授業研究を行いながら、日常の授業やその他の学校生活全般の中で、教師がどのような存在として児童に関わるべきか、指導の内容や言動等を中心に情報交換や見直しを行った。



- ②・国語科の授業を1、3、5年生で行い、「自由進度型の学習」をキーワードとした授業づくりに取り組んだ。具体的には、学習の様々な場面で児童が学び方等を選択できること、めあてを持って学習に取り組んだり自分の学習を振り返って次に生かしたりできること、そういった授業デザインの中に ICT を利活用すること等を、各学年の児童の実態や発達段階に応じて検討した。そして、それらについて授業での児童の姿から検証をした。



- ③・ウェアラブルカメラを使い、教師の視点から授業を見直し、授業における教師のよりよい在り方を模索した。授業研究会を授業当日の研究会と別日に設定し、ウェアラブルカメラの映像を見返しながら注目すべき授業場面を選定した。授業研究会で、その場면을共有し、授業者インタビューを交えながら全体で交流し、教師の在り方について研究を深めた。



- ・ICTの効果的な利活用について情報交換をし、授業づくりや教材づくりに生かした。

2. 研究の成果と課題（○成果 ▲課題）

- ①○校内研の目指す授業を支える「教師の在り方」について、昨年から引き続き研究を重ねることで、具体的な姿や価値について考えを深めることができた。特に、今年度は、「教師の在り方研究会」を通して新たな授業研究会に挑戦することができた。
- 本指定校事業において、この研究内容が適切かという迷いもあったが、教師の適切な支援や子供が学びに向かう環境設定等といった教師の仕掛けが、子供主体の授業改善において大切な視点であることが確認できた。
- ▲児童の新たな学びの姿は、決まった形があるものではなく、児童の実態や学習内容によって様々な形が考えられる。授業をデザインする指導者が、こういった学びの意義をしっかりと理解するとともに、学校内で共通理解をしながら進めていく必要性を感じた。教師一人一人の指導観、教育観は見えにくいものであり、想像よりも大きな意識改革が必要であった。それらを変えていくことの難しさを感じるが、子供主体の授業をデザインする上で重要な視点であると考えている。
- ②○国語科における3本の授業実践を通して、授業デザインについて、具体的に考えられた。また低学年、中学年、高学年で1本ずつの授業実践を行うことで発達段階に応じた授業デザインについても考えることができた。
- 「自由進度型の学習」をキーワードに、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指した授業づくりに取り組むことができた。「児童が選択する場面」「めあて・振り返り」「協働する場面」等、具体的な授業デザインのポイントを意識しながら、教職員一丸となって授業づくりについて考えることができた。特に協働する場面においては、子供が協働したくなるような課題設定や教師の適切な声掛けがポイントになることが分かった。
- ▲2年間の研究では、授業実践はまだまだ不十分である。他の教科での展開、指導要領に示された指導事項や評価との関わり等について、児童の実態や変化と共に日々の授業の中で試行錯誤しながら実践を重ねていく必要がある。
- ③○新たな取組として、ウェアラブルカメラの映像を使った研究会に挑戦した。授業中における一つの場面を見て深掘りしたり、インタビューを通して授業者の意図や葛藤等について理解したりと、従来の授業研究会では捉えることが難しい視点で学び合うことができた。それにより、授業中の教師の働きかけに至る内的プロセスを学び合うことができた。そのことが新しい実践へ意欲を持って取り組むきっかけになった。
- 授業づくりでの資料共有、児童が学習で使うワークシート等、新しいアプリや今までと違う使い方を試したことで、ICTの効果的な活用について模索することができた。

「子供主体の授業づくり」の事例について

【小学校・第5学年・国語科（書くこと）・もう一つの物語】
 ～児童の実態を踏まえながら、可能な限り子供主体を目指す授業デザイン～

1 本事例のポイント

- ・ICTの活用 → 児童が自ら学習を進められるような環境づくり
- ・子供が自走して学ぶ時間の確保 → 教師は見守りと個の支援へ

2 本事例の概要 **読む人がワクワクするような構成でもう一つのお話をつくろう**

(1) 単元全体の見通し

(2) 物語の基本的な構成を知る

(3) 構成メモをつくる

① めあて・ループリック提示・マイプラン学習シート

- 課題を共有した後、自分の目標を設定

② 構成メモづくり・交流・検討(30分)

- 元になる物語文や動画はクラウド上へ
※ 児童が自ら必要な資料を取りに行く
- 共同編集のワークシートを主に使用
※ 児童は友達のシートを参照、教師もモニタリング
- 協働的に学ぶことも選択しながら取り組む

③ 振り返り(マイプラン学習シート)

- 本時の学びを振り返る

(4) メモを基に物語をつくる

(5) 互いに読み合い感想を交流する

Point !

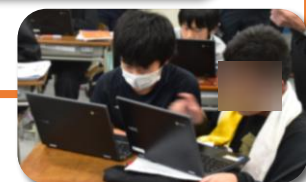
- ・「友ティーチャー(先生役の友達)」がめあてやループリックを提示
※ 児童の実態では、児童主導の展開はまだできないが、児童が主体的に学習を進める意識付け

Point !

- ・課題設定と環境設定の大切さ
- ・教師は見守りと個別の支援の往還
- ・授業をよりよくするためリアルタイムで再考

Point !

- ・児童の様子から判断して・・・
「即時に修正」or「児童に任せて待つ」
- ・迷いや葛藤を自覚しながらも
この学び方のメリットに焦点



○一人一人が課題解決に向かえる課題の設定と学習に必要な資料のクラウド上への用意(環境設定)が、児童が集中して取り組む時間をつくり出した。同時に、教師がじっくりと個別対応したり授業展開を再考したりする時間ができた。

▲振り返りの時間を十分に確保できなかった。学びの成果や課題を確認、共有、価値付けする時間を大切にしたい。